

琉球大学学術リポジトリ

[短報] 沖縄におけるミカン栽培と輸入

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄農業研究会 公開日: 2009-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊良波, 幸仁 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015254

沖縄におけるミカン栽培と輸入

伊 良 波 幸 仁
(琉球植物防疫所)

1940年頃まで沖縄で栽培されていたミカンは、ほとんどが在来種のオートウ、カーブチ、羽地ミカン、タルガヨウ、ユウクニブーなどで、その他ポンカン、タンカン、バレンシャなどの外来種もあったが、ただ珍らしさで植えた程度の極くわずかであった。また野生種のシクワシャーの類が果物として市場に出まわったほか、バショウ布の洗剤としてもよく利用されていた。当時はミカンの消費量も極めて少なく、宅地内栽培程度の生産量では必要をみたしていた。換金作物としての価値が低かったため、大々的に栽培されることもなく、その栽培方法も原始的な自然放任状態であった。

ところが1950年頃からの消費人口の増加と食生活の向上により、諸外国からの消費物資の輸入が増加し、農業形態も以前までの主食生産主義から換金作物の栽培へと変わり、サトウキビ、パイナップル、野菜類などが主として栽培されるようになった。またミカンの需要量も相当多くなってきたが、ミカンの成木が戦争でほとんどつぶされ、また山に残った野生のシクワシャーも、国有林、村有林などが乱伐された際にふみつぶされてしまい、需要をみたすだけの生産がなく、ほとんど輸入品でまかなわれるようになった(1940年に134万kg生産されたミカンが1952年には6.6万kgと激減している)。しかし1955年に178万kgだった輸入量が毎年増加し、1967年には第1表で示すように1,000万kg270万ドルにのぼっている。輸出国は、本土からウンシュウミカン、ナツミカン、ポンカン、サンボウカンなど10余種、アメリカからオレンジ、グレープフルーツ、レモンなど、台湾からポンカン、タンカンなどが輸入されている。このように需要のびにより、一般農家でも換金作物としてのミカン栽培の関心が高くなり、各農家では、シクワシャーを台木として、オートウ、カーブチなどを増加するようになった。しかし専門の種苗園がないため、必要量の苗木を生産することができず、本土から輸入されるようになった。しかしそれらの種苗は沖縄の栽培条件に適す

るものが少ないためある商社では1962年来沖縄のミカン穂木を本土の種苗園へ輸出し育成させて再輸入するようになった。穂木の種類はポンカン、オートウ、カーブチなどがあり、台木はカラタチで1966年には5,500本も輸入された。しかし農家では在来種以外の品種も栽培するようになり、現在ではウンシュウミカンが一番多く輸入されておりタンカン、ポンカン、ナツカンがそれにつき、1968年には2月現在すでに15.7万本の苗木が輸入されている。現在沖縄におけるミカン果実の生産量は93.4万キロと推定されており、需要の10分の1にも足りない。そこでミカン栽培熱が高くなったことは喜ばしいことであり、栽培管理技術の向上により今後の生産を高めていきたいものである。

表1 ミカンの輸入量

年 度	数 量	価 格
63年	4,218,769 ^{キロ}	1,181,414 ^{ドル}
64	5,243,520	1,377,358
65	6,539,744	1,655,759
66	9,836,003	2,206,608
67	10,222,393	2,710,518

表2 ミカン苗木の輸入量

年 度	数 量	価 格
56～ 62年	52,705 ^本	8,407 ^{ドル}
63	10,728	3,235
64	25,948	5,354
65	59,043	8,594
66	89,882	11,902
67	64,110	12,406
68 (2月現在)	157,215	34,384